

## 「盲ろう者として生きて」考えること

東京大学先端科学技術研究センターバリアフリー分野教授、福島智

### 1. 私の体験

私は9歳で失明し、18歳で失聴した全盲ろう者です。私が盲ろう者となったのは今から31年前、1981年の初めのことでした。

18歳で全盲の状態から盲ろう者になったとき、とてつもなく大きな衝撃を私は受けました。

私に最も大きな苦痛を与えたものは、見えない、聞こえないということそのものではなく、他者とのコミュニケーションが消えてしまったということでした。私は絶望の状態にありましたが、その暗黒と静寂の牢獄から解放される時がやってきました。その解放には三つの段階がありました。

第一はコミュニケーション方法の獲得、私の場合は新しいコミュニケーション方法の発見でした。つまり、「指点字」という新しいコミュニケーション法が母によって発見され、私は再び他者とのコミュニケーションをとり戻すことによって、生きる意欲と勇気がよみがえってきたのです。

第二の段階は指点字という「手段」を用いて実際にコミュニケーションをとる相手、身近な他者に恵まれた、ということでした。

そして、第三の段階は、「通訳」というサポート、すなわち、私にコミュニケーションの自由を保障してくれるサポートを安定的に受けられる状態になった、ということです。

### 2. 私が受けたサポートの本質

私がこれまで受けてきたサポートの中で、最も重要なものは、「通訳」という行為です。それがなされるまで、私は地下の牢獄に幽閉されているような心境でした。

私を含め、盲ろう者にとっての「通訳」とは、外部世界と盲ろう者をコミュニケーションと情報の両面でつなぐことです。しかし、外部情報は無限にあります。どうすれば、限られた「語数」で情報を伝えられるのでしょうか。

### 3. 豊かなコミュニケーションを求めて

私を最後の一線で救ったものは、他者との広義のコミュニケーションです。

では、豊かなコミュニケーションとはなんでしょう。それを考えるうえで、そもそもコミュニケーションとは何かを振り返ってみることも有意義です。

「コミュニケイト」の語源はラテン語のコミュニカーレ（communicare）だと言われます。このコミュニカーレの意味は、単なる「情報の伝達」ということだけではなく、「共有する」、「理解し合う」、「共に何かを行う」といった意味もあると言われます。

私は盲ろう者を含めたすべての人にとってのコミュニケーションの問題を考えると、このラテン語のコミュニカーレの意味を尊重すべきなのではないかと思います。つまり、たとえば、盲ろう者の豊かなコミュニケーションの実現のためには、盲ろう者から、あるいは周囲の側からの一方向的な発言ではなく、盲ろう者が抱える苦悩や喜び、潜在的な能力や可能性を本人と他者との間で共有すること、両者の協力で新たな状況を作り出すことが重要なのではないかということです。

そこで鍵を握るのは、「共感力」と「想像力」です。

#### 4. 私の体験から考える障害者の自立と社会参加の三つのポイント

こうした自らの体験を通して、私は障害者の自立と社会参加にとって大切なポイントは三つあると考えています。

その第一は、生きるための基礎的な手段を提供し、生きるうえでの意欲と勇気を障害者一人ひとりがもてるように励ますことです。このポイントには、教育や医療、リハビリテーションの取り組みなどが含まれます。

第二のポイントは、こうした手段を駆使して、障害者が生活していくうえで、実際に接触する身近な他者が協力する、ということです。とりわけ、同じ障害をもっている仲間の協力はたいへん有益です。

このポイントには、当事者や家族の自助的取り組みや市民の差別的意識の改革、といった取り組みが含まれるでしょう。

そして、第三のポイントは、障害者一人ひとりが自らの幸福な人生を追求することを支援する仲間の協力を安定的に支えるための、社会の法制度的な枠組みです。このポイントには、障害者に対する差別をなくし、その尊厳を大切にす法律の制定や障害者の福祉・保健・医療をめぐる諸施策、就労を支援する制度の充実・整備、などの取り組みが含まれるでしょう。

#### 5. 苦悩と希望

ヴィクトール・フランクルは、その著書『意味への意思』の中で、次のような図式を示しています。

「絶望」 = 「苦悩」 マイナス 「意味」

この図式について考えてみます。

まずこれは、苦悩と絶望が同じものではないことを示しているでしょう。絶望と異なり、苦悩には意味がある、ということです。

次に、「意味」について考えます。「意味」を左辺に移項して、「絶望」を右辺に動かします。すると、

「意味」 = 「苦悩」 マイナス 「絶望」

となります。「絶望」の反対は「希望」です。ここから、

「意味」 = 「苦悩」 プラス 「希望」

という新たな展望が開けるのではないのでしょうか。

苦悩の中で希望を抱くこと、そこに人生の意味があるのだと思います。

## 6. ことばは体験から、知性は対話から

2011年10月にヘレン・ケラーさんの生家を訪ねました。

そこで実感したことがあります。

第一は、「ことばは体験から生まれる」ということであり、

第二は、「知性は愛情に裏打ちされたやり取りから生まれる」という認識です。

(参考資料1)

〇これが言いたい

防災とバリアフリーを経済コストで測るな

被災障害者の危機は人災だ

「毎日新聞」2011年4月28日 朝刊 10面  
福島 智 東京大先端科学技術研究センター教授

空気ポンペを背負い海に潜るスキューバダイビングは、よく知られている。

では、地上で暮らしながら、常に「目に見えない海水」に潜った状態で生活している人たちのことをご存知だろうか。重い病のために、酸素吸入器や人工呼吸器を常時使用している人たちのことだ。

仙台市太白区の土屋雅史さんもその一人で、4年前、全身の筋力が徐々に衰える筋萎縮性側索硬化症（ALS）を発症した。人工呼吸器やたんの吸引器が命綱だ。

53歳の今、全身で動くのは眼球だけだ。その目の動きでパソコンを操作し、一文字ずつ言葉を刻み、この度の震災体験をつづった。

「突然大きな横揺れ、すぐ停電。呼吸器の非常アラームがピーッと鳴った」

土屋さんが普段「潜水」を続けていられるのは、電気によって人工呼吸器などが動いているからだ。しかし停電になれば、頼りはバッテリーだけとなる。いわばバッテリーの残量が、「潜水時」の空気ポンペの残量だ。

「いきなり吸引器が止まった。40分のバッテリーだ」

幸い、土屋さんは周囲の人の綱渡りのようながんばりで助かった。他にもきわどい例は多く、今月初めには停電の影響で亡くなった人もいた。

これらの人たちが経験した生命の危機は、天災ではなく人災に属する。つまり、地震による長期の停電を、現行の福祉・医療施策が想定していなかったからである。

ところで今、防災や原発の関係者の口から、「想定外」という言葉がよく出される。それを聞きながら、私は「防災とバリアフリー」の共通点を考えた。

たとえば、障害を持つことは多くの人にとって想定外の出来事だろう。

しかし、個人にとって想定外であっても、ある社会の中でどういう障害がどの程度の頻度で発生するのか、その全体的傾向は想定できる。その想定に従い、どんな人が人生のどの時期にどのように特殊な障害を持っても、きちんと生活できるように、最善の社会的取り組みを目指すのが、バリアフリーの基本理念である。

一方、地震や津波など自然災害も、いつどこでどんな災害が発生するか、正

確には想定できない。しかし、歴史的・地理的観点で、どんな規模の災害が発生するか、その全体的傾向は想定できるはずだ。いつどこでどのようにまれな災害が発生しても、最善の社会的取り組みを目指すのが、防災の目標だろう。

\*

両者には、さらに二つの共通点がある。第一は、防災もバリアフリーも安全と安心、言い換えれば、人の命や夢や希望を守る営みだということであり、第二は、いずれも経済的コストがこれらの取り組みへの制約要因になる点だ。つまり、発生頻度の低い障害や災害であればあるほど、それらへの取り組みは「コスト的に現実的ではない」とされてしまうということである。

しかし、これはおかしい発想だ。本来命や夢や希望は、コストを計測できない価値である。それを経済的コストとてんびんにかける発想自体、根本的に誤っていないか。

この度の大震災を経験した日本は、従来の物質的な豊かさとしての経済成長を目指すのではなく、人の命と生活の真の豊かさに力点を置いた、社会・経済・科学技術の発展を目指すべきである。

3・11を人間中心の社会に向かう新たな日本のルネサンスの契機とすることこそ、生を断ち切られた人々の魂に報いる道なのだと思う。

ふくしま・さとし 9歳で失明、18歳で聴力も失い、盲ろう者となる。専攻は障害学、バリアフリー論。博士（学術）。

<http://mainichi.jp/select/opinion/iitai/news/20110428ddm004070030000c.html>

(参考資料2)

指先の宇宙

福島 智

ぼくが光と音を失ったとき  
そこにはことばがなかった  
そして世界がなかった

ぼくは闇と静寂の中でただ一人  
ことばをなくして座っていた

ぼくの指にきみの指が触れたとき  
そこにことばが生まれた  
ことばは光を放ちメロディーを呼び戻した

ぼくが指先を通してきみとコミュニケーションするとき  
そこに新たな宇宙が生まれ  
ぼくは再び世界を発見した

コミュニケーションはぼくの命  
ぼくの命はいつもことばとともにある  
指先の宇宙で紡ぎ出されたことばとともに

(2001年10月作)